調 査 報 告

学部留学生が直面する困難、対処方略、必要とするサポート

―京都大学 iUP からの知見―

阿久澤　弘陽 #、河内　彩香、佐々木　幸喜 *

要　旨

本稿では、京都大学で実施されている学部留学生プログラム（Kyoto iUP）で学ぶ留学生の直面する困難、困難への対処方略、必要とするサポートを、インタビュー調査を通して明らかにし、留学生の支援策について論じた。具体的には、留学生が講義聴解や日本人との会話における即時的なやり取り、日本人との関係構築に難しさを感じていること、この背後には留学生の日本語力不足だけでなくホスト側の日本語使用の配慮不足や交流に関する意識の問題もあるため、日本語の支援だけでなくホスト側の異文化交流意識の涵養も求められること、留学生は人的サポートを特に重視しており、異文化対応に困難を感じた際には、同じ困難を共有するプログラム生や出身地といった繋がりが重要だと考えていることを論じた。また、人的サポートの充実とコミュニティ構築の支援が重要だが、支援と自律性の涵養の適度なバランスと、コミュニティの先輩や成員がときに留学生の長期的な視野の欠如をもたらし得る点に留意が必要であることも指摘した。

【キーワード】学部留学生、困難、対処、サポート、支援

1.　はじめに

大学の国際化政策の進展に伴い、学部留学生の受け入れ、教育、支援に関する体制を充実させる重要性はますます高まっていくことが予測される。こうした体制を整える上で、大学での学修において留学生がいかなる困難に直面しており、それに対してどのように対処しているか、また、どういったサポートが重要だと考えているかを知ることは不可欠である。こうした調査研究は既に蓄積があり（二宮・中矢 2004、藤井・門倉 2004、横田・白土 2004、中園 2006、守谷 2012、藤井 2014、菅長・中井 2017、田中・椎名 2018、阿久澤他 2022、など）、多くの知見が得られている。

本稿もそうした研究と目的を共有するが、その際、①調査対象者を特定のプログラムに限定し、②日本語運用能力を必ずしも持たない留学生の学習支援を考えることとする。まずもって、学部留学生プログラムは、プログラムの規模・期間、予備教育なのか交換留学なのかなどといったプログラムの目的・性質、奨学金などの金銭的支援の有無など多様な要因によって特徴づけられるもので

* 京都大学国際高等教育院
# 責任著者

ある。したがって、調査対象を限定した上で知見を積み上げることも重要である。この点は、得られた知見を現場で活かすという実践可能性という点からも無視できない。また、近年の国際化政策の文脈における学部留学生への支援を考える上では、日本語力を必須としない留学生の受け入れの拡大を考慮に入れる必要がある。これは、2000 年代後半以降の英語のみで学位取得が可能な英語学位プログラムの拡充に代表される。すなわち、近年は（少なくとも入学時に）必ずしも日本語運用能力を持たない留学生の学修をいかに支援するかという課題が生じているわけである。

こうした背景に鑑み、本稿では、京都大学で実施されている Kyoto iUP（Kyoto University International Undergraduate Program）を取り上げる。Kyoto iUP（以下、iUP とする）は、世界各地から優秀な留学生を受け入れることを目的としており、選抜時に日本語力を問わないプログラムである。その代わりに、留学生の日本語力に応じて約半年から 2 年程度の短期間でアカデミックレベルの日本語力を習得し、大学での学究が日本語で可能な留学生を育成することで、広い意味で日本に貢献し得る高度な人材を輩出することを目指している。こうしたプログラムは大学の国際化の文脈における留学生プログラムの新しい形の一つであると言え、この類のプログラムの可能性や課題を検証する必要があろう。本稿では、iUP 生へのインタビュー調査を通して、彼らが直面している困難とそれに対する対処方略、そして、彼らが大学生活で必要とするサポートを明らかにし、大学側が提供すべき支援について論じる。

なお、分析の便宜上、本研究の調査対象者が学ぶ留学生プログラムを iUP として表記するが、得られた結果は iUP と似た同様のプログラムにも適応可能であると考えられたい。

2.　調査の概要

2.1　調査対象者

調査対象者の iUP 生について述べる前に、まず、iUP の概要について、本稿に関係ある範囲で確認しておく。iUP は、0.5 年の予備教育課程と 4 年の学士課程の計 4.5 年からなる学部留学生プログラムである。選抜では十分な英語運用能力と、大学での学修において必要十分と判断されるだけの学力を有するかが選考基準となる。出願時点での日本語力は問われないが、学部専門教育の教授言語は日本語であり、iUP 生には大学での学修に必要な日本語運用能力を持つことが求められる（佐々木・河合 2019: 49–50）。また、日本の教育課程と留学生の出身国・地域の教育課程で学習内容にズレが見られる場合があるため、留学生は予備教育期間中に日本語教育と専門基礎教育を受けることで学部での専門教育に備える。iUP 生の多くは、日本語初級レベルで渡日するため、生活の基盤を築きつつ、日本語や専門の学習に励むことになる。なお、iUP 生は、入学金や授業料が免除されるとともに、日本で大学生活を送る上で必要十分な金銭的支援を受けている [1]。

本調査の対象者は、2021 年 10 月から半年の予備教育を経た後 [2]、1 年間大学の学部で勉学に励んだ 17 名である。対象者は調査時点で大学 1 年生で、所属学部は、工学部 6 名、経済学部 4 名、理学部 3 名、農学部 2 名、教育学部と法学部が 1 名ずつであった。出身国･地域は、インドネシア、韓国、カンボジア、シンガポール、タイ、台湾、ベトナム、香港、マレーシア、ミャンマー、モンゴルであった。学部 1 年生を対象としたのは、渡日以降大きな環境の変化を経験したばかり（または経験している最中）であり、また、プログラムを運営する側が留学生を支援する必須性が高い時期であるという理由による。

2.2　調査・分析の手続き

2023 年 2 月から 3 月にかけて、1 名につき 30 分から 1 時間 30 分程度（計 15 時間 43 分、平均 55 分）の半構造化インタビューを実施した。インタビューは、オンラインビデオ通話を用いて行い、対象者 1 名に対し調査者 2 名が質問をする形式をとった。調査者はいずれも日本語教育に携わる教員である。インタビューでは、属性に関すること、日本語の使用実態や日本語使用に関する自己評価、日本語の有効性、困難、サポート、学部入学前と現在のギャップなどについて語ってもらった。なお、調査にあたっては倫理的配慮を十分に行った。具体的には、研究の目的と意義を伝え、調査への協力が任意であること、調査後でも辞退できること、プライバシーが守られることなどについて、書面と口頭で説明を行った。

録音を文字化したものを分析のデータとし、留学生が直面する困難点、留学生活での困難への対処方略、留学生活で役に立つサポートに関する語りをそれぞれ抽出した。抽出した語りは、KJ 法（川喜田 2017）を援用して分類した。まず、データ内容を単位化し、内容に基づきラベルを付した。その際、ひとまとまりの語りであっても複数の内容が含まれる場合は異なるラベルを付した。次に、類似したラベルをグループ化し、グループの内容を反映するグループ名を付した。類似例が見つからない場合は無理にグループ化することは避け、単独カードとして残した。さらに、類似度が高いグループ同士は統合し、上位のグループを作成するという手順を踏み、データのカテゴリー化を行った。

3.　結果

本節では、留学生が直面する困難点、留学生活での困難への対処方略、留学生活で役に立つサポートに関する分析結果を提示する。本文中での結果の記述は、大カテゴリーを【 】、中カテゴリーを〔 〕、小カテゴリーを《 》、単独カードを〈 〉で示す。丸括弧内の数字は語りの数である。図の見方については、図 1 の「結果の図の見方」を参照されたい。

3.1　留学生が直面する困難

留学生が直面する困難（全 140 例）は、図 1 のように分類･整理された。大カテゴリーは 4 つで、留学生自身の日本語力不足、日本人の発話スタイルなどによって日本人との会話に難しさを感じているという【日本人との会話の理解に関する困難（32)】、専門科目についていくだけの「聞く」力の不足、専門知識不足、専門科目でのアウトプットの難しさ、専門科目についていくのに多大な労力を払っているという【日本語で行われる専門科目対応の困難（29)】、自身の意図が日本語で伝えきれない難しさや立場の違う相手への言葉遣いに悩んでいるという【日本人とのやり取りにおける産出の難しさ (25)】、日常生活での日本語や異国での一人暮らしに困難を感じているという【異国生活への対応の難しさ(24)】である。これらの大カテゴリーに含まれない中カテゴリーは 3 つで、漢字学習の難しさや語彙力不足の克服の難しさを認識している〔日本語の学習における困難 (12)〕、日本人学生との交流に難しさを感じている〔日本人学生との関係構築の難しさ（7)〕、日本語科目での勉学に苦労しているという〔言語としての日本語授業で感じる困難（3)〕である。その他、以上の大・中カテゴリーに含まれないものとして、同じ授業を取らなかったことで同じプログラム生との距離を感じたという《iUP 生と同じ授業を履修しなかったことによる友人関係における距離の発生（2)》、《予備教育時の授業履修上の困難（2)》という小カテゴリー 2 つと、〈就職に関する

図１　留学生が直面する困難（全 140 例）

不安〉、〈観光客への対応に対する言語選択の難しさ〉、〈体調管理の難しさ〉、〈文化や価値観の違いによる他人との付き合いの難しさ〉の単独カードが４つ作られた。横田・白土（2004: 51–54）は、在日留学生の抱える問題点及びニーズを、「専門分野の教育・研究に関する領域」「語学学習に関する領域」「経済的自立と安定に関する領域」「生活環境への適応に関する領域」「青年期の発達課題に関する領域」「交流に関する領域」の６つに分けているが、本研究の結果は「経済的自立と安定に関する領域」を除いてかなりの程度並行的な結果であると言える。

3.2　留学生活での困難への対処方略

留学生活での困難への対処方略（全 77 例）は、図２のように分類・整理された。大カテゴリーは５つで、専門科目理解の困難を、語彙学習やレポート執筆練習などの日本語の練習をすること、配付資料などの視覚情報を用いること、他者に助けを求めることなどで解消を目指す【専門科目受講における困難の克服方略（18)】、漢字習得や日本語の表現力を豊かにするために様々な策を講じている【日本語力向上のための努力（17)】、出身地との繋がりや同じプログラムの学生との繋がりによって充実した日常生活を送る努力をしているという【充実した日常生活を送るための方略（16)】、日本人との日本語のコミュニケーション成立のために努力する一方で、特定の発言や行動を行わないなどの回避行動をとることもあるという【日本語コミュニケーション上の困難への対処方略（13)】、同じプログラムの先輩やプログラムの事務職員に助けてもらうことで複雑な書類手続きに対処するという【書類手続き上の困難への方略（7)】である。上記の大カテゴリーに含まれない小カテゴリーが２つで、日本語科目受講での困難を解決する努力を行っているという《日

図２　留学生活での困難への対処方略（全 77 例）

本語で行われる日本語科目への対応に向けた努力（2)》、自身の態度や日本語の使い方を変えることで日本人の友人作りに励んでいるという《交流の仕方を変えることでの日本人の友人作りのための努力（2)》である。その他、〈ひたすら努力することによる難しい予備教育時の数学科目の克服〉、チケット購入用機械の操作困難に関する〈インターネットの検索サービスの利用や漢字調べによる機械操作の困難克服〉の２つの単独カードが作られた。

3.3　留学生活で役に立つサポート

留学生活で役に立つサポート（全 93 例）は、図３のように分類・整理された。大カテゴリーは４つで、先輩 iUP 生や共に学ぶ仲間としての iUP の友人が大学生活において重要であるという【iUP 生同士の縦横の繋がりの重要性（20)】、プログラムの教員による日本語や履修相談などの支援に助けられているという【iUP 教員による多面的で柔軟な支援の重要性（14)】、学部や出身が自分と同じであることで得られるサポートが大きな意味を持つという【大学生活上の学部や出身地の繋がりの重要性（11)】、履修授業などの大学生活におけるアドバイスや学術的な助言をもらうことができるチューターによるサポートが役立つと認識している【チューターから得られるサポートの有益性（9)】である。上記大カテゴリーに含まれない中カテゴリーは３つで、主に事務手続きの支援でプログラム担当事務に頼っているという〔学生の多様な相談に柔軟に対応可能な iUP 事務の重要性（16)〕、大学生活を送る上で日本人の友人による助けが大事であると認識している〔日本人の友人から得られるサポートの重要性（7)〕、家族からの心理的な支援や助言が重要だと考えている〔家族からのサポートの重要性（6)〕である。上記大･中カテゴリーに含まれない小カテゴリー

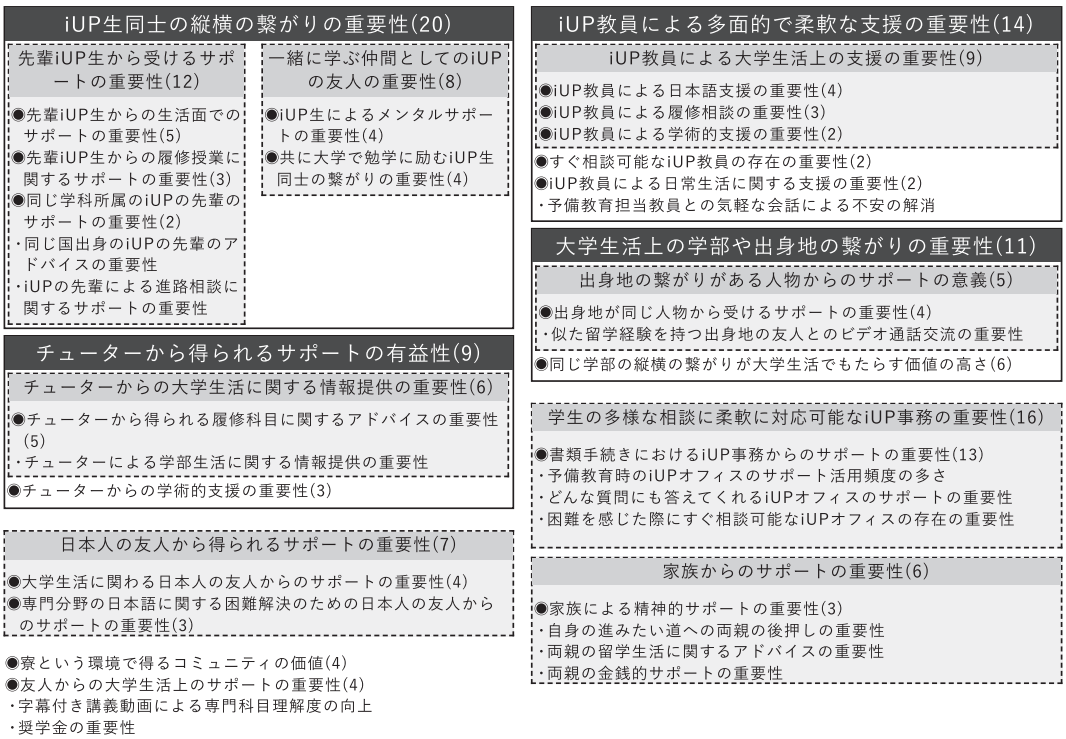

図３　留学生活で役に立つサポート（全 93 例）

として、寮生活で得られるコミュニティに価値を感じている《寮という環境で得るコミュニティの価値（4)》、友人一般の助けが必要不可欠であるという《友人からの大学生活上のサポートの重要性（4)》[3]が、単独カードとして〈字幕付き講義動画による専門科目理解度の向上〉[4]と〈奨学金の重要性〉が作られた。

4.　考察

まず、留学生が直面する困難とそれに対する対処方略を見てみよう。なお、以下、適宜留学生の発話を引用するが、発話はそのまま書き起こしている。最も分かりやすい困難は、専門科目の受講に際した困難である。留学生は、〔専門科目における聴覚情報の処理の難しさ〕〔専門的な知識の不足による専門科目受講の難しさ〕〔専門科目における日本語での産出の難しさ〕などを感じており、概ね先行研究での指摘（菅長･中井 2017、田中･椎名 2018、阿久澤他 2022、など）と同様である。これに対して、留学生は、〔日本語力を磨くことでの専門科目受講困難の解消〕を目指すだけでなく、授業資料の入念な読み込みなど〔視覚情報を利用した専門科目の聞き取り困難解消〕や、先輩から過去の試験問題の傾向を教えてもらったり留学生同士で助け合ったりする〔他者からのサポートによる専門科目の困難解消〕によって解決を図ろうとしている。こうした困難への対処方略も、概ね先行研究の指摘（山下・品川 2009、田中・椎名 2018、など）に沿うものである。また、専門科目受講の困難として、留学生は〔日本人学生より時間が取られる専門科目への対応の大変さ〕を感じているが、これは専門科目を理解するための努力を怠っていないことの裏返しであろう。

今回の調査では、どちらかといえば、「聞く」「話す」といった困難が詳細に語られており、留学生がレポート課題という産出の難しさよりも講義理解の難しさを感じ取っていることがうかがえる。その点で、留学生が特にレポート課題に困難を感じていると指摘する先行研究（阿久澤他 2022）とは異なる。阿久澤他は、留学生に対しては日本語力の養成だけではなくレポートの書き方のような初年次教育的な教育が必要であると主張しているが、本研究での留学生はそうした初年次教育的なレポートの書き方よりも、より即時的な対応が求められる場面において困難を感じ取っていると言える[5]。これは、【日本語コミュニケーション上の困難への対処方略】における〔対面での日本語使用の回避〕とも通底し、こうした困難を解消するための支援方策の検討が求められる。

上記の即時的な対応の難しさは、留学生が感じる【日本人との会話の理解に関する困難】や【日本人とのやり取りにおける産出の難しさ】にも反映されていると考えられる。留学生は、《語彙に起因する日本人の発話の理解の難しさ》を感じる一方で、《関西弁による日本人の発話の理解の難しさ》など周りの日本人が使う「教室で習う」日本語とは異なる日本語の理解にも困難を感じている。日本人とのやり取りには〔会話のスタイルによる日本人との会話参与の難しさ〕もあり、会話の速度や多種多様な話し方への対応を難しいと思っているようである。また、会話での産出においては、〔日本語力不足に起因する自身の意図を完全に伝える難しさ〕や〔日本語力不足に起因する非対称な立場の人物とのコミュニケーションの難しさ〕を感じており、自身が言いたいことを適切な方法で正確に伝えるだけの力の無さを自覚している。こうした困難に対して〔対面での日本語使用の回避〕をすることもある一方で、「たまに表現できないものがあって、日本人の友達が（中略）英語を理解してくれるので（英語で話すこともある)。できれば全部日本語で話したいなとちょっと思います」[6]という語りに代表されるように、《日本人との会話に日本語で参加する積極的な態度》で臨んだり、《英語の補助的利用によるコミュニケーションの達成》を目指したりするといった〔日

本語コミュニケーションを成立させるための方略〕を立てている。こうした英語の補助的利用は英語運用能力が高い iUP 生ならではの困難の克服方法の一つであるが、英語だけに頼らず日本語を使う態度を維持している点は、iUP という日本語の運用能力が必要なプログラムの性質を反映していると考えられる。

こうした困難の解決には、留学生自身の日本語力の向上が当然求められるが、ホスト（受け入れ）側の意識も重要である。「先生たちは尊敬してるので、ちょっと気を付けて話すことが大事なので、それのためちょっと僕が言いたいことを 100 パーセント言わなかったんです」という語りからも明らかなように、教員と留学生の立場が非対称であることが留学生の発話を妨げている可能性を常に考慮すべきである。留学生が発話しやすい雰囲気を作る努力が欠かせない。他にも、日本語母語話者のクラスメートとの会話で感じる困難として、「日本語を教えている先生と日本語で話すときに、日本語の先生が留学生はどんな変な日本語を使っているか理解しているので、分かりやすく説明」してくれる一方、「（日本語教員以外の）日本語のネイティブは、（中略）なぜ留学生が分かってくれないの？っていうのは分かりませんので、分かりやすく説明しようと思っていても、（中略）あまりよく分かりません」という語りが見られた。これは、日本語教員のように訓練を積んでいないクラスメートは、留学生の日本語レベルを適切に判断できず、そのために留学生に対して理解できない日本語を使ってしまうということである。つまり、日本人学生が留学生のレベルに合わせた日本語を話すことができないため、〈日本語の難易度を適切に調整できないネイティブ学生の会話の聞き取りの難しさ〉を留学生が感じているということになる。加えて、既に述べた通り、留学生は方言の理解にも困難を抱えており（中園 2006: 47）、こうした点にホスト側が自覚的になることが、留学生の支援においては欠かせない。

ホスト側の自覚に関連して重要なのは、留学生が〔日本人学生との関係構築の難しさ〕を感じている点である。ここには、「たぶん一番ショックだったことは、一般の日本人の学生があまり（中略）勉強に興味がない、とか、外国に、外国に興味がないこと。（中略）とっても日本人の友達といっぱい作るのを期待していたけど、やっぱり難しいのだと気づきました」という留学生の語りから分かるように、ホストとしての日本人学生への失望が含まれている。これについては、交流を阻害する要因として既に大橋（1991）や横田（1991）で指摘されており、現在もなお、留学生と日本人学生の交流において同じ課題が見られているということになる[7]。

留学生は、〔日本人の友人から得られるサポートの重要性〕を認識しており、《交流の仕方を変えることでの日本人の友人づくりのための努力》や《日本語上達のための日本語環境への飛び込み》もしているが、ホスト側の意識が留学生に向いていなければ留学生のコミュニティは広がらない。ホスト側の異文化交流意識を高めることが、留学生支援を考える上で喫緊の課題の一つなのではないだろうか。藤井（2014: 160）はこうした人間関係構築の難しさの背景に、留学生が勉学以外の場にあまり参加していないことを挙げている。また、横田（1991: 92）では、日本人学生が留学生が日本人の集団に飛び込んでこないという意識を持っていると述べられている。そうした可能性も十分あり得るが、本研究の結果からは、留学生の努力だけでは根本的な問題の解決が見込みにくいことがうかがえる。実際に、中園（2006: 48）や守谷（2012: 13）でも、留学生が望んでいるにもかかわらず日本人の友人を作るのに困難を感じていることが報告されている。

他にも、留学生は【異国生活への対応の難しさ】を感じている。まず、留学生は《生活関連の書類手続きにおける日本語の難しさ》を感じているが、同じ iUP 生や iUP 職員に援助してもらうという〔他者の手を借りることによる手続き上の問題への対処〕を行っている。事務職員の援助だけ

でなく、同じ手続きを行う仲間の存在が意味を持つことが分かる。また、留学生は、〔異国での一人暮らしの難しさ〕も感じているが、これに対しては、出身地の料理作りや出身地の友人などとの交流を通した〔出身地との繋がりを利用した困難への対処〕を行っている。同じような文化背景を持つ人たちとの交流の重要性は、留学生が必要とするサポートとして〔出身地の繋がりがある人物からのサポートの意義〕を挙げていることからも分かる。こうした出身地の繋がりが、留学生の心的な健康を維持するという点において意味を持つと言える。

次に、留学生が必要としているサポートに目を転じると、留学生は特に、人的なサポートを重視していることが見て取れる。まず、【iUP 教員による多面的で柔軟な支援の重要性】や〔学生の多様な相談に柔軟に対応可能な iUP 事務の重要性〕から、留学生が iUP の事務職員・教員の支援が重要であると考えていることが分かる。同様に、チューターや日本人学生のサポートも意味があると考えている。留学生は、《専門分野の日本語に関する困難解決のための日本人の友人からのサポートの重要性》を認識しているが、この点は特に、上記【日本語で行われる専門科目対応の困難】を解決する上で重要である。単に日本語上のサポートだけでなく、「授業の資料で先生が書いた日本語は分かりにくいときは友達に聞くと説明してくれるときもあるし、日本人の学生はそれも俺も分からないよって言われたら、ああ日本人も分からないことだねって安心できることもあります」という語りに見られるように、日本人から情報を得ることで不必要な不安を払拭できることがある。

加えて、ここで注目すべきは、【iUP 生同士の縦横の繋がりの重要性】や【大学生活上の学部や出身地の繋がりの重要性】から分かるように、留学生が同じ立場を共有できる、コミュニティ的な繋がりがある人物からのサポートを重視している点である。学部留学生は、一口に留学生といっても、留学生単位での何らかのまとまりをなしているわけではなく、留学生同士の繋がりが希薄になることがしばしばある。その点で、iUP というプログラムがもたらす人的な繋がりが重要な役割を果たしていることがここからはうかがえる。これは例えば、「精神のサポート。ストレスが溜まってる時と、大切な電話をしないとめっちゃ緊張してその時のサポートも。そして色々な在留カードを作るとか、一緒にするからそんなに（中略）負担は感じなかった」といった語りによく示される。こうした繋がりがもたらすサポートの重要性は、《寮という環境で得るコミュニティの価値》からも判断できる。寮では同じ出身の学生や同じ境遇にある友人・知人との交流がたやすく、特に渡日直後の心の準備に一役買う（横田･白土 2004: 302）。これらのことから、留学生の支援においては、プログラムがあることによってもたらされる繋がりの創出という視点と、プログラム内の十全なサポート体制の構築、そして留学生のコミュニティ構築を促すような仕組みが欠かせないと言える。

一方で、留学生が《先輩 iUP 生からの履修授業に関するサポートの重要性》や《チューターから得られる履修科目に関するアドバイスの重要性》を感じている点には留意も必要である。友人・先輩・教員から集めた情報や自身の経験を基に履修科目を決める方略を、山下・品川（2009: 4）は「メタ認知ストラテジー」と呼び、講義理解において重要な意味を持つとしている。これは事実であろうが、「iUP 先輩たちはこの授業取った方がいいですよとかあります。チューターさんも、これ難しいならこれしなくてもいいとかも、あります」という語りは、履修の必要性が自身のキャリア上の必要性ではなく、授業の難易度によって決められている可能性を示唆しており、否定的な影響を与える恐れもある。したがって、留学生本人の興味や将来の進路に沿った助言を与える機会を確保しておく必要があるだろう。留学生自身が既に《iUP 教員による履修相談の重要性》を感じていることから、それをさらに意味のある形で自覚してもらうことが欠かせない。

もう一点注目に値する点として、プログラムによるサポートに関する言及が多いのに対して、所

属学部のサポートに関する言及がほとんどなかった点が挙げられる。これは、プログラムのサポートが手厚くそれが重宝されているという反面、留学生がプログラムの支援に依存しているということを示している可能性もある。支援の手厚さは支援側の疲弊に繋がるとともに、留学生の自律性も損ないかねない。支援の充実と自律性の涵養のバランスを常に模索する必要があるだろう。

5.　おわりに

本稿では、京都大学 iUP のプログラム生を対象にインタビュー調査を行うことで、留学生が直面している困難とそれに対する対処方略、大学生活で必要とするサポートを明らかにするとともに、留学生の支援策について得られる示唆について述べてきた。本研究で論じたことをまとめると以下の通りである。

（1）留学生は、専門知識や日本語力不足によって専門科目の理解に難しさを感じているが、日本語力を磨くだけでなく、講義資料などの視覚情報を用いたり、他人に相談したりすることで対処している。講義聴解に関する支援が特に求められる。
（2）留学生は、専門科目や日本人とのやり取りにおいて、即時的な対応に困難を感じている。会話力向上のための支援だけでなく、ホスト側が発話しやすい雰囲気を作ったり、自身が使う日本語の難易度を適切に制御したりする努力をするよう意識する必要がある。
（3）留学生は日本人との関係構築に難しさを感じている。この難しさの背後には、留学生側の日本語力の問題だけでなく、ホストである日本人学生の交流意識に起因する障害もあり、日本人学生の異文化交流意識の涵養が急務である。
（4）留学生の日本という異文化への困難への対処において、同じ困難を共有する iUP 生の存在や出身地などの繋がりが重要である。
（5）留学生は特に人的なサポートを重視しており、留学生の学修において、プログラム内の十全な人的サポートとコミュニティ構築の支援が大切である。
（6）留学生が先輩から履修科目などの助言をもらう際には、長期的な視野を欠く可能性があるので留意すべきである。
（7）プログラムで得られる支援に依存しすぎることがないよう、プログラムからの支援と留学生の自律性の涵養の間で適切なバランスを模索する必要がある。

以上から分かることは、留学生への支援はプログラム内で完結するものではないということである。したがって、プログラムに直接関わりのない教職員や学生が、程度の差こそあれ様々な形で留学生支援の一端を担っているという意識を持つことが肝要である。これは、何らかの形で留学生に歩み寄ることが求められていると言い換えることもできる。例えば、留学生の日本語のレベルに応じて自身の日本語の難易度を調整する力を身に付けることもその一つである[8]。優秀な留学生を獲得しても、ホストである日本人側と相互交流が生まれなければ単なる機会損失であり、それでは大学の国際化を達成したことにはならない。本調査では、「日本人の友達は私に日本語を説明してくれて、私は、数学のこととかプログラミングのこととか教えてます」という留学生の語りも見られたが、こうした雰囲気が大学全体で醸成されてはじめて、iUP のような留学生プログラムは成功したと言える。加賀美・小松（2013: 285）も「支援する人と支援される人は循環しており、互恵的

関係性と変化可能性を持つ。相手に負荷をかけ自尊心を低下させる支援ではなく、支援を意識させない、身近なピア・サポートのような学生同士の協働的活動の積み重ねが大学コミュニティに浸透していったとき、それが大学コミュニティにおける多文化共生の姿といえるであろう」と述べている。留学生プログラム内での支援だけでなく、その外での支援方法についても考える視点が、留学生の支援においてますます必須となることが予想される。

本稿の調査は、あくまでも Kyoto iUP という特定のプログラム生を対象とした調査である。しかし、「選抜時には日本語力を問われないが、大学の学修においては日本語が求められる」というプログラムは、優秀な留学生の獲得と日本の大学での学修の両立を目指すという目的を達成するための解決策の一つであり、こうしたプログラムの拡がりが今後予想される。ここには、英語から日本語への急激なトランジション（河内 2024）をいかに留学生が克服するか、またそれをいかに支援するかという課題が生じる。こうした類のプログラムの可能性と課題を検討することには、今後の留学生教育や日本語教育の道筋を考える上で大きな意味があると考えられる。多角的な視点を取り入れながら引き続き議論をしていく必要があるだろう。

注

1　ただし、こうした金銭的支援は学力・学習態度などの審査の上支給されるメリット・ベースの支援であり、在学していれば無条件で支援を受けられるわけではないことに留意されたい。

2　予備教育は、本来であれば、事前に来日し京都大学で受けるという形式であるが、本調査の対象者については、コロナ禍の影響により、2021 年 10 月から大学で受講を開始できた学生は 3 名であった。その他の学生は同時双方向型の授業を現地で受講し、2022 年 2 月から 4 月にかけて来日した。

3　ここでの「友人」は iUP 生その他の留学生の友人・日本人の友人などを含む可能性があり、他の友人のサポートに関するカテゴリーに統合されるという考え方もできる。しかし、当該の語りではどのような友人かが限定されておらず、「友人」が指す対象が特定できない。本稿ではこのように、対象が特定不可能な場合、これを別扱いとした。

4　字幕付き講義動画は、京都大学工学部が構築した「自動音声認識・機械翻訳字幕システム」（本多 2022）である。これは、講義の録画に日英語の字幕を付し、専門科目の受講に困難を感じている留学生限定で公開しているもので、講義理解度の促進に役立ててもらうことを目指している。本録画は講義に出現する要学習語彙の一覧を作るリソースとしても活用されている（阿久澤他 2023）。

5　この理由を探るにはさらなる調査と検証が必要であるが、可能性としては、本調査の対象留学生が世界各国の優秀層でありレポート作成にかかるスキルセットを元から持ち合わせている、大学入学前の予備教育課程での準備学習によって大学教育に対するレディネスが一定程度できている、などといったことが考えられる。

6　語りの引用内の括弧表記は、語りの一部省略、もしくは筆者による補足であることを示す。

7　近森（2006）は、京都大学の学生の留学志向を三層に分け、海外留学に積極的な「積極派」が 2 割に満たないこと、また、文系に比べ理系に「消極派」が多いことを指摘している。本稿の調査対象者の iUP 生は理系が多く、彼らが身を置く環境が現在も「消極派」が多数派であるかもしれない。こうした日本人学生の意識が、iUP 生と日本人学生の交流の難しさの一因となっている可能性がある。

8　例えば、一つの方法として菊地他（2012）の学部教養科目の実践が挙げられる。日本語教授体験を通して、受講した日本人学生が母語を客体化して、留学生の日本語学習に自らの語学学習経験を重ねて学びを再考し、人との関わりへの意識を深めていく様子が観察されたという。日本語教育の「人を育てるツール」としての可能性が示唆されている。

参照文献

阿久澤弘陽・岡村佳代・黒﨑佐仁子・棚橋明美（2022）「日本語科目と専門科目をつなぐための橋渡しプログラムの役割」『京都大学国際高等教育院紀要』5、19–35.

阿久澤弘陽・岡田幸典・河合淳子・佐々木幸喜・河内彩香・長谷部伸治（2023）「講義動画字幕システムから見る専門科目における語彙の使用実態」『日本語教育支援システム研究会第 10 回国際研究集会予稿集』、191–194.

大橋敏子（1991）「留学生オリエンテーションの課題」『異文化間教育』5、49–65.

加賀美常美代・小松翠（2013）「大学コミュニティにおける多文化共生」加賀美常美代編著『多文化共生論―多様性理解のためのヒントとレッスン―』明石書店、265–289.

川喜田二郎（2017）『発想法 改版―創造性開発のために―』中央公論新社.

河内彩香（2024）「エリート教育の葛藤―日英ハイブリッドプログラムの抱える課題をどう乗り越えるか―」村田晶子･神吉宇一編著『日本語学習は本当に必要か―多様な現場の葛藤とことばの教育―』明石書店、49–68.

菊地康人・増田真理子・前原かおる・河内彩香・竹山直子・向井留実子（2012）「学部教養科目としての初心者向け“超短期日本語教育実習”」『日本語教育方法研究会誌』19-1、38–39.

佐々木幸喜・河合淳子（2019）「オンラインによる渡日前準備学習―留学生活への円滑な移行を目指して―」『留学生交流・指導研究』22、49–59.

菅長理恵・中井陽子（2017）「エピソードから探る学部留学生の困難点と克服方法―予備教育の果たすべき役割―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』43、65–79.

田中里奈・椎名渉子（2018）「留学生の抱える講義理解における困難点とストラテジーから支援体制のあり方を考える―フェリス女学院大学における事例検討―」『フェリス女学院大学文学部紀要』53、113–136.

近森高明（2006）「留学志向の三層と留学支援のありかた―積極派・消極派・浮動層のプロフィールを手がかりに―」『京都大学における国際交流の現状と可能性―第 2 回アンケート調査報告書―』、43–54.

中園博美（2006）「島根大学の学部留学生に関する一考察―留学生活の困難点を中心に―」『島大言語文化』20、41–63.

二宮皓・中矢礼美（2004）「留学生調査にみるわが国の大学院受け入れ体制の現実と課題―大学院留学生調査と教員調査の自由記述分析を通して―」『広島大学留学生センター紀要』14、47–63.

藤井桂子（2014）「留学生は何に困難を感じているか―2003 年と 2012 年のアンケート調査結果から―」『ときわの杜論叢』1、145–171.

藤井桂子・門倉正美（2004）「留学生は何に困難を感じているか―2003 年度前期アンケート調査から―」『横浜国立大学留学生センター紀要』11、113–137.

本多充（2022）「講義動画字幕システムの構築と運用」『ことばと社会』24、64–76.

守谷智美（2012）「大学における新入留学生受け入れの現状と課題―留学生支援コミュニティ創出に向けた日本語教育の視点から―」『コミュニティ心理学研究』16-1、3–16.

山下直子・品川直美（2009）「講義理解のためのストラテジーに対する留学生の認識―学部留学生への縦断的調査から―」『言語文化と日本語教育』37、1–10.

横田雅弘（1991）「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5、81–97.

横田雅弘・白土悟（2004）『留学生アドバイジング―学習・生活・心理をいかに支援するか―』ナカニシヤ出版.

Challenges Faced by Undergraduate International Students, Coping Strategies, and Required Support: Insights from Kyoto University's iUP Program

Koyo Akuzawa#, Ayaka Kawachi, Yuki Sasaki*

Abstract

This paper examines the challenges faced by international exchange students enrolled in the international undergraduate program at Kyoto University (Kyoto iUP). Through interview surveys, it elucidates the difficulties encountered, coping strategies employed, and support required by these students. Specifically, it reveals that international students experience difficulties in interacting with Japanese individuals during lectures and conversations, as well as in building relationships with them. These challenges are partly attributable to the limited language skills of international students. They are also attributable to Japanese people's inadequate use of Japanese and lack of intercultural skills. This suggests that nurturing cultural exchange awareness within the host community is as essential as providing Japanese-language support. The study highlights the emphasis that international students place on human support and their belief that connections such as sharing similar challenges with program peers or having common hometowns are crucial when facing difficulties related to intercultural adaptation. While it is important to enhance human support and community-building assistance, a balanced approach must also be struck between support and autonomy cultivation. Additionally, advice from seniors or other community members can deter international students' long-term perspective.

Keywords: undergraduate international students, difficulties, coping strategies, support, assistance

* Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

Corresponding author